コンサートと音楽活動

小岩信治

はじめに

私は音楽文化の研究者として、本学の文化資源としての音楽活動についてお話します。フロアには「一橋大学の音楽」について私より詳しい方も多数お出でですが、そのような方々の間では繰り返し伝えられていることがらでも、ふだん音楽に特段興味をお持ちでない方と「学際的」に共有することが大切です。

一　兼松講堂――怪物の棲む講堂――での音楽活動

一九二七年創建のこのユニークな建物（収容一〇四〇人）の各所で顔を見せている怪物たちは、音の響きに直接関わっています。二〇〇三年からの講堂改修にコンサートホールの音響の専門家として参画された福地智子氏の言葉を借りれば、兼松講堂の独特な響きを作り出す要素の一つが壁面に付いている奇妙な彫刻群、つまり怪物たちなのです。「あの怪物たちが、反射音を拡散させ、音をまるく、やわらかくしているのです」。そして氏は「兼松講堂の美しい響きは、怪物たちがつくりだしているといってもいい」とまとめておられます（本学広報誌ＨＱ第二号、二〇〇三年一二月）。

一―一　音楽堂としての歴史

次に兼松講堂での過去の音楽活動について、歴史を眺望するため、二つの時期の様子をとりあげましょう。

一つは終戦直前の一九四四年の一シーンです。その年の一〇月に本学学生出征学徒壮行会が行われ、ピアニスト原智恵子氏が、当時兼松講堂にあったドイツ・ベヒシュタイン社の楽器を弾いています。氏はショパン国際ピアノコンクールの日本人初の入賞者で（一九三七年）、兼松講堂での出演は多くの方々の記憶に残りました。こうして厳しい時代においても、世界の第一線で活躍する音楽家が、他では体験できない質の高い音楽を提供していたのです。この催しについては当時の学生田中秀一氏の言葉が残されています（HQ第三号、二〇〇四年四月）。

次に戦後の、一九五〇年代前半の様子を想像してみましょう。このころ国分寺市役所職員であった進藤文夫氏の言葉を借りれば、「その頃（「戦後の一時期」、つまり昭和二四―二五年から三〇年ころ）、東京のクラシック音楽会場といえば、日比谷公会堂か共立講堂ぐらいなものだった」。氏はそして、前述の原氏のほか、ピアニストとして井口基成、安川加寿子各氏、ヴァイオリンの辻久子氏など、蒼々たるメンバーの音楽家たちがその舞台に立ったことを伝えています。兼松講堂は「地域の音楽ホール」（新藤氏）でした。

その後一九七〇年代以降の海外演奏家の登壇など、兼松講堂の演奏史の話題は尽きませんが、大切なのは兼松講堂がその歴史のなかで、学内・地域における音楽演奏の重要拠点で有り続けたことです。二〇〇三年からの大改修のきっかけとなったのも二〇〇〇年の音楽会であり、当日の出演者ハンスイェルク・シェレンベルガー、ヴォルフガング・シュルツ、そして吉野直子の三氏がこの講堂の音響を高く評価したことによります。翌二〇〇一年にはウラジーミル・アシュケナージ氏がチェコ・フィルハーモニー管弦楽団とともに公演しました。

一―二　音楽堂としての現在

続いて兼松講堂での現在について、まず在学生の活動をみてみましょう。昨年度、音楽関係のサークルが兼松講堂で活動した日数は一三一日、そのうち「本番」が二八回です。つまり三日に一度は音楽が鳴り響き、平均して一ヶ月に約二回「コンサート」が行われたことになります。

一年間に公演と練習合わせて五〇日を兼松講堂で過ごしたのが一橋大学管弦楽団です。そもそも本学管弦楽団は他大学オケに比べて公演回数が多い方ですが、兼松講堂だけでも四月のスプリングコンサートなどいくつもの公演があります。本日、休憩のあいだにメンバー九名がこの会場で演奏します。

室内楽、つまり小編成の音楽サークルであるスケルツァンドは、四〇日ほど活動しています。スタインウェイ社のグランドピアノが日常的に鳴り響くのは、この団体の活動によるところ

が大きいと言えます。ほかに吹奏楽団、コール・メルクールなど合唱団、アカペラ・サークル、ギター部などが演奏しています。

しかし兼松講堂を使うのは学生だけではありません。本学の場合、卒業生による音楽活動も活発です。演奏する卒業生もいれば、演奏会をつくる、アートマネジャーとしての卒業生もいます。

特徴的な例として昨年秋の《聖母マリアの夕べの祈り》の公演を挙げましょう。イタリア・バロック音楽の巨匠クラウディオ・モンテヴェルディの大作が、ソロ歌手・合唱、そして当時の楽器を集めたオーケストラで演奏されました。指揮は、鍵盤楽器奏者として知られる社会学部卒の渡邊順生氏。兼松講堂の短めの残響がバロックの歯切れのよい音楽に合うこともあり、ホールの特性を活かし、大学らしい知的関心を喚起する催しでした。この回を含めた「くにたち兼松講堂　音楽の森コンサート」を企画・運営するのが、経済学部卒の瓦林秀嗣氏を中心とする如水コンサート企画です。昨年秋のコンサートは二〇〇五年以来通算二六回目でした。

昨年度の「貸館」公演としてはほかに、二〇一〇年に本学と「一橋大学兼松講堂レジデントオーケストラ」の名称使用協定を結んだ国立シンフォニカー（商学部卒の宮城敬雄氏が率いるオーケストラ）の公演、くにたち市民オーケストラのファミリーコンサート、合唱コンクール、国立音楽大学附属高等学校の招待演奏会などが行われました。

こうして、昨年は学生の活動とあわせて一四〇日ほど、兼松講堂で音楽が響いたことになります。さまざまな大学行事も行われていることを考えると、その数は驚異的と言ってよいでしょう。

二　佐野書院での音楽活動

大学の南にはかつて佐野善作・東京商科大学初代学長の私邸（一九二九）があり、これが一九九四年に改築され、以来大学のセミナーハウスとしての機能を担っていますが、この「佐野書院」は次第に演奏会場としての役割も果たすようになります。言語社会研究科で教鞭を執られた田邊秀樹氏や本学卒業生が中心となって、二〇〇二年以来「佐野書院サロンコンサート」が年に数回開催されています。佐野書院には中庭を見渡すサンルームがあり、小編成の演奏を聞くために八〇席前後を配置できます。昨年度までにこのシリーズの公演は六四回を数え、国内外の著名な音楽家が登場しています。

三　まとめにかえて

本学キャンパスにおける音楽活動，本学の音楽文化資源は、簡単に全体を網羅できないほど豊かです。二つの建物の継続的な演奏活動をご紹介しましたが、本日は全体のごく一部しかご紹介できません。

今回の公開講座にあたって、ある方から一橋に「文化資源」と言えるものはあるの？　と尋ねられました。この問いに対して、例えば社会科学古典資料センター所蔵のトマス・ホッブズ『リヴァイアサン』初版のような文献資料を挙げることもできます。本日私が紹介してきた音楽活動も、その果実を享受した方々にはわかりやすい価値を提供しています。けれども本学には、そのようないわば「評価の確立したもの」以外にまだまだ多くの資源があるでしょう。それを見つけるためにはおそらく見方を変える必要があり、今日のような催しはそのためのヒントになるのです。

（こいわ　しんじ／言語社会研究科准教授）